シンポジウム

コメント

# 政治，社会的文脈での映画「Er ist wieder da」

三好範英

## 1　重く問いかける娯楽作品

映画「Er ist wieder da」のヒトラー役の主演男優オーリヴァー・マスッチ（1968年生まれ）が映画のプロモーションのために来日した2016年6月，彼に都内でインタビューをした。その準備の必要もあって映画は試写会と，配給会社から提供されたDVDで二回見た。さらに，今回，学会シンポジウムでコメントをする必要から，もう一度DVDで見直した。

毎回，刺激的な，かつ映画としての質も高い作品，との感想は変わらなかった。娯楽映画，風刺映画ではあるが，扱っているテーマは真摯かつ深刻なものである。たくさん細かい仕掛けがあり，例えば，ARDの討論番組「hart aber fair」の現実の司会者をしているフランク・プラスベルクが，映画の中の討論番組の司会者として登場して，ヒトラーと議論を交わす場面を作ったりしている。ドイツ人視聴者にとっては，虚構と現実の境界がいっそう曖昧になる効果がある。

映画は終わりに近づくほど，ますますその境界が曖昧となり，渾然一体となって，そのまま最後の場面まで観客の関心を引っ張っていく。その全体の構成もなかなか秀逸だと感じた。

誰でも気づくように，この映画の特徴の一つは，ドキュメンタリー，ルポルタージュ的な部分がかなりの部分を占めていることである。そこに写されているドイツの「現実」は衝撃的である。収録したのが2014年の11月から12月にかけてで，まだ2015年夏から秋の難民危機が本格化する前だが，出演するドイツ人は口々に外国人の排斥感情，広い意味での「政治的な正しさ（political correctness）」への反感を公言する。

印象的なシーンをいくつかあげれば，シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州のある町のインビスの女性がヒトラーと交わす会話。東ドイツ出身というこの中年女性は，移民の子供が来て，店に向かって石を投げつけて壊すのだが何もできない，下手に抗議すると移民の親に刺されてしまう，と嘆く。やはり同じ州で収録した映像で，レストランで食事をしていた初老の男性が「髭面の男はイスラム過激派だからどんどん追放しろ」と力説する。「移民は知能指数（IQ）が低い」とか，「我々ドイツ人はナチの過去があるので，何も言えないのだ」といった発言も拾われている。

最初に見たときにはドイツ人はここまで本音を言うようになったのかと驚きが

先に立ち，今シンポジウムのキーワードを使えば「タブー破り」の方向のシーンに，まず強く印象づけられた。もちろん，西ドイツ以来，ドイツの政治，社会，文化にわたるあらゆる側面を性格づけてきたこの微妙な問題を扱うときに，格別の慎重さが求められることは言うまでもなく，いろいろ予防線を張っていることにも注意は向いたが，まずは「タブー破り」の強烈さに圧倒されたのである。

## 2　二つのベクトルのせめぎ合い

ただ，二回，三回と見るうちに，従来の「政治的に正しい」方向のシーンを多数配してバランスを取っており，これらのシーンも印象的であることを再発見した。テレビ局アルバイト職員の恋人はユダヤ系という設定だが，彼女の祖母が自宅を訪ねてきたヒトラーを見て，家族を殺害したヒトラーを決して忘れないと叫びだすシーンなどはわかりやすい例である。ヒトラーを重用するかどうかを巡るテレビ局内の権力闘争も，「タブー破り」派に対する「政治的に正しい」派の抵抗という形で展開する。

そして最大の仕掛けは，そもそもヒトラーが現代に蘇る，という完全にあり得ない設定が映画の土台になっていることである。そのため，映画のあらゆる発言，設定が相対化される。かなりきわどい発言も，そもそも荒唐無稽な架空の話なので，という逃げ道が用意されていることになる。

両者のバランスを表現するシーンとしては，バイエルン州の山中で，もう中年に差し掛かっている息子と，老婆になっているその母親が並んでヒトラーと対話をかわすという場面があるが，「間違いを繰り返さないために歴史を学ぶ」という息子に対して，母親が「おまえはナイーフ（naiv）だ」とたしなめるような口調で言う。ドイツ人の持つ建前と，それをやんわりと相対化する知恵を象徴するシーンだろう。

今までの戦後ドイツ映画が，「政治的に正しい」方向からの表現が圧倒的だったことを考えれば，「タブー破り」の方向のメッセージに圧倒されたのは無理もなかったか，と思うが，その衝撃から醒めれば，映画で映されるそれぞれの方向のベクトルは，だいたい同程度ではないか，との印象を強くする。

恐らくこうした映画の作り方は，今のドイツの社会や思想状況を反映しているに違いない。

その点で私が想起するのが，ヒトラーの著作『我が闘争』の出版問題である。

第二次世界大戦後，（西）ドイツ政府は，米占領軍からバイエルン州が引き継いだ著作権をたてに，『我が闘争』の再刊を認めてこなかった。しかし，ヒトラーの死後70年の2015年末で著作権が切れることはだいぶ前から意識されていた。新たな措置を講じなければ，2016年１月１日を期して，ドイツの書店に『わが闘争』が平積みになる，といった事態が予想された。

ドイツ政府としては，ユダヤ人団体などからの反発が必至な，そうした事態は避けたい。他方，表現出版の自由もある。そこで政府が取った対応は，学術的な『我が闘争』の出版については黙認するが，単なる再刊については，特定の国民や人種グループへの憎悪を扇動することを禁じた刑法の「国民扇動罪（Volksverhetzung）」などを適用して阻止する，というものだった。

すでにミュンヘンの「現代史研究所」が，2009年から詳細な注釈付きの『我が闘争』の出版準備を進めていた。この出版に対して一部のユダヤ人団体から反対する意向も表明されたが，2016年1月に同書は，政府の事実上の黙認のもとで，大きな混乱もなく出版された。一方，『我が闘争』が続々再刊されるという事態は阻止され，ユダヤ人団体などから強い反対も起きなかった。

このように，ドイツ政府は，反ユダヤ主義の台頭を警戒するユダヤ人団体の動向，ドイツ社会の現状，言論出版の自由の理念などを天秤にかけ，かなり巧みに事態を処理したといえるだろう。「政治的正しさ」と「タブー破り」の二つのバランスを取る対処の仕方は，「Er ist wieder da」の映画の作りと相通じるものがある。

## 3 「声なき声」の継続と変化

二つのベクトルがせめぎ合うドイツの現状は，「継続」と「変化」の両面から見ることができるのではないか。

人類史上の巨悪であるナチズムやユダヤ人殺戮の過去を抱える戦後（西）ドイツでは，「政治的な正しさ」に従う要請は，他の先進諸国と比べても格段に強かった。ただ，その中でも，「政治的な正しさ」に対する違和感や反発は連綿として伏在してきた。それはドイツメディアでほとんど取り上げられことがなかった，いわば「声なき声」だった。

私は13年前に上梓した著書の中で，戦後ドイツの「声なき声」の一例として，ベルリン市内の広場や通りに女優マレーネ・ディートリヒ（1901年～1992年）の名前を冠することに反対するベルリン市民の声を紹介した(1)。ディートリヒはいうまでもなく映画史上に名を残すドイツ出身の女優だが，第二次世界大戦中に連合国軍の慰問活動を熱心に行ったことも，ドイツ国内では，少なくともある世代まではよく知られた話である。

「ディートリヒ広場」に改名することに反発する市民は，抗議の手紙を地元の区役所に送った。その中から，取材了解を得られた人を区役所に紹介してもらい，1999年秋に幾人かを訪ねて回ったのである。

私の聞いた人は全て70歳以上の男女の老人だったが，日本で一般的に伝えられる「過去を克服したドイツ人」とは異質な意見の表明に，ずいぶん新鮮な印象を

（1） 三好範英『戦後の「タブー」を清算するドイツ』（亜紀書房，2004年），226頁。

受けたことを覚えている。印象深かった発言を列挙すれば，次のようである。

「第二次世界大戦中，毎晩，私たちが爆撃で家を破壊されているときに，ディートリヒは敵の軍のための慰問に熱心だった。彼女は祖国を完全に捨てた。彼女は『ドイツ人とは握手をしない』などと言っている。大げさな言い方で自分の名声を保とうとした。祖国に泥を塗る発言だ。」

「確かに我々がヨーロッパに恐怖と災いをもたらしたことは明らかだ。しかし，民主主義者たちが必ずしも正しかったわけではない。1939年の世界地図を見れば，英国がインド，アフリカなどでどれほど多くの民族を抑圧していたかわかる。」

「ドイツでは常に異なる意見が抑圧されている。若者の暴力の60%はトルコ人によるものだ，と言ったことも口に出してはいけない。それが人々が自分の意見を言いたがらない理由だ。最悪なのは我が国の政治家だ。フランスも戦争に負けたことはあったが，自国民や兵士を愚弄しただろうか。日本はどうか。敗戦後，復員した兵士を罵倒するといったことはあったのか。」

こうした考え方は，「Er ist wieder da」の中で，移民や，既存の政治が担う「政治的正しさ」への反感を口にする，約15年後のドイツ人の考え方と重なり合う。

明確な根拠があるわけではないのだが，こうした考え方を信条とする人の割合は，ドイツ人の中のせいぜい10%くらい，どんなに多くても20%を超えることはないだろう。ただ人間の心理は複雑だから，仮に確信的な考えを持たなくても，多くのドイツ人の心の中で，時には主流の歴史認識に違和感を持ったり，外国人に反感を抱いたり，ということもあるだろう。つまり，「政治的な正しさ」と「タブー破り」が同じ人間の中に共存し，状況や人生の時期によってどちらかの要素が強く出てくる，ということもあるに違いない。

こうした基本的な「継続」の構図の上に，近年の「変化」がある。ドイツで「Er ist wieder da」が制作され，広く受け入れられた理由を説明するには，この変化の側面に着目しなければならない。

まず，西ドイツ以来，とりわけ1970年代以降は，「政治的正しさ」が圧倒的に優勢だった言語空間に，2000年代に入った頃から変化が現れてきた。戦後半世紀以上，ドイツ統一後10年以上の時間の経過は，やはり無視できない意味を持っていた。

ギュンター・グラス（1927-2015）の小説『蟹の横歩き』が，被追放民問題を正面から取り上げた作品として話題になったのは2002年だったし，映画の世界では「ヒトラー～最期の12日間～」（2004年）が，ヒトラーを初めて人間として描きタブーを破ったと評価された。「政治的正しさ」に対し，「タブー破り」のいわば反抗が始まった，といってよいかもしれない。

その変化をさらに一歩進めたのが，「Er ist wieder da」と言える。この映画が含む「タブー破り」のメッセージは，過去のいくつかの類似の方向性を持った作

品に比較しても，もう一段と刺激的になっている。

そしてこの変化を直接的に後押ししたのが，映画に登場する普通のドイツ人が口々に語るように，移民や難民の増大，イスラム過激派の浸透，それにともなう治安の悪化，テロの発生と言ったドイツ社会が直面する危機だろう。

その変化はすでに，社会民主党（SPD）党員でドイツ連邦銀行理事だったティロ・ザラツィンが2010年に出版した『ドイツは消滅する（Deutschland schafft sich ab)』がベストセラーになったことに現れていた。ザラツィンは同書で，イスラム教徒移民のドイツ社会への同化が進まず「平行社会」を形成しており，教育程度の低いイスラム教徒移民の出生率が高く，やがて多数派になっていくことから，ドイツ社会の「知的可能性」が衰えていく，などと主張した。

## 4　現実政治における「タブー破り」

この変化を政治の世界で端的に物語るのが，右派政党「ドイツための選択肢(AfD)」の成立と拡大である。この政党の勢力拡大を可能にしたのは，2015年夏以降の大量の難民流入だった。

時間軸をやや長く取れば，AfD 発足と拡大の背景にあるのは，メルケル政権の下，与党のキリスト教民主同盟（CDU）の性格が変化したことである。それまでSPD や緑の党が掲げてきた徴兵制の停止，非伝統的な家族政策，同性愛者の権利拡大，二重国籍の容認，最低賃金の導入，そして脱原発といった政策を CDU は取り込んだ。キリスト教民主主義の理念で，中間から右寄りの層を糾合していたが，メルケルのリーダーシップでいわば「社会民主主義化」や「左傾化」が顕著となった。

それは，ドイツ社会の変化を受け，より多くの支持を調達するための左への傾斜だったが，支持基盤の一つだった保守層が取り残された。彼らは自党に失望し，すでに難民危機以前から CDU 離れを起こしていた。

そして，2015年夏以来の難民危機のショックこそが，こうしたもともと CDU 支持者だった人々と，CDU 保守層よりもさらに右寄りの考えを持つ人々，つまり私が18年前に話を聞いた「声なき声」の人々とを結び合わせる接着剤となった。AfD が2015年 7 月の党分裂の危機から蘇ったのは，ひとえにこの難民危機故である。

AfD は2017年夏までの段階で，ドイツ16州（ハンブルクなどの市も州相当）のうち13州議会に進出した。2017年 5 月のノルトライン＝ヴェストファーレン州議会選挙は，4 月のケルン党大会での激しい党内抗争の顕在化の後だったにもかかわらず，7.4％の得票率で議席を獲得した。AfD はキリスト教民主・社会同盟（CDU・CSU）の右に位置する10％程度の固定支持層（Stammwähler）を，獲得したように見える。AfD が今後も存続してドイツ政治に安定した地位を占めるので

あれば，戦後ドイツ政治にとって時代を画する現象であり，文化状況の行方にも大きな影響を与えるに違いない。

メディアの状況にも二つのベクトルが対峙している。4月のAfD党大会は，同党の代議員が左派過激派の妨害に遭って，警察官の警護なしには会場にも入れない，という状況だった。これは，民主主義の原則の観点から明らかにゆゆしき事態だが，それを問題視する報道や論説は極めて少なかった。ドイツの主要メディアは依然としてこれまでの「政治的正しさ」に強く規定されている。

その一方で公共放送ARDにしても『シュピーゲル』誌にしても，AfDの政治家をかなりの時間，紙面スペースを割いて取り上げざるを得ないという状況は生じている。2015年大晦日のケルン大聖堂前広場での多くの移民・難民の若者たちによる婦女暴行事件について，おそらく「政治的な正しさ」にとらわれたが故に，既成メディアの報道は遅れた。ただそのことが大きな非難を浴び，その後のメディア報道は，犯罪容疑者が移民や難民だった場合，それをことさら伏せることは少なくなっている印象はある。

## 5　国民意識の分裂はあり得るか

このようにドイツの政治，社会，文化の領域を通覧した私の印象は，「タブー破り」の言語空間が拡大し，今や各領域でもはや否定できない地位を占めるようになったことである。政治領域ではなお「政治的正しさ」が優位を占めるものの，「Er ist wieder da」に見られたように，社会領域や文化領域の一場面を取り上げれば，もはや両者が拮抗するまでに至っているかもしれない。

今後この均衡が大きく崩れるという事態が起こりうるだろうか。

繰り返しになるが，ドイツのタブーの多くが，ナチズムという，70年以上も前に起きた過去の経験を，二度と繰り返さないという反省に由来していることを素直に考えれば，時間の経過とともに「政治的に正しい」立場は，次第に希薄化することが予想される。他方，100万人以上の難民を受け入れても，国民の3割以上が依然として難民受け入れに肯定的な意見を述べるドイツの国民意識を考えれば，「政治的に正しい」ことを誇りにする思想や政治が支配的となるような，世界でも特異な「道徳帝国」（ハンガリー首相のオルバン・ヴィクトル）になっていくのかもしれない。

長期的には移民，難民の同化の成否が，大きな意味を持ってくるのではないか。今のドイツ政治の主流は同化政策，つまりドイツ語を学習させることと，民主主義，人権などドイツの価値に外国人を取り込むことによって移民，難民問題の解決を図る考え方である。しかし，それが厳しい現状にあることは，2017年4月に行われたトルコの憲法改正を巡る国民投票で，ドイツ在住のトルコ系住民の多くが，エルドアン・トルコ大統領支持を表明したことを見ても伺われる。ドイツに

支配的な価値とは相容れない，強権支配を強めるエルドアンを支持することは，同化への拒否を示すものだからである。トルコ人に対してうまくいかなかった同化政策が，アラブ系を中心とした新たな難民ではうまくいくと予想することは難しい。

トルコ系とアラブ系の対立，アラブ系によるユダヤ系への抑圧，さらにトルコ系の中でもエルドアン派，それに反対する世俗派，さらにクルド系の間で三つ巴の抗争が起こらない保証はないだろう。移民，難民問題を背景とした治安悪化がドイツ人の意識に与える影響はおそらく甚大なものとなる。

ドイツが，濃淡はあれこれまで良好な関係を築いてきた米国，ロシア，トルコなど多くの国との関係が悪化していることも深刻である。英国は欧州連合（EU）離脱の準備に入った。こうした対外関係の変化が，どのようにドイツ社会に作用していくかも考えねばならない。トルコの政情がドイツに直接影響を与えるようになったし，ドイツのメディアによると，ロシアはドイツ国内のロシア系住民や右派勢力に対し，資金提供などを通じて影響力を行使し，政情不安定化を画策しているという。

映画で示唆されたような，ヒトラーやナチズムの再来などは，現実にはとても想像できない。ただ，国内の分裂がのっぴきならないところまで進行することにより，それを巧みに挑発し動員する内外の勢力によって既成政治の統治能力が弱体化し，混迷が深まっていく，そんなドイツの未来像も考えられないわけではない。その時は，「政治的な正しさ」と「タブー破り」の対立などは，もはや意味を失っているのだろう。

## 6　ヒトラーになりきることの難しさ

最後に主演男優のマスッチとのインタビューについて若干紹介したい。彼は身長187cmの偉丈夫で，小柄なイメージがあるヒトラー役としては違和感があるが（実際にはヒトラーは徴兵時，身長175cmで当時としては小柄ではなかったようである），映画が成功した理由の一つは彼の演技力によるところも大きいだろう。

マスッチはもともと舞台俳優であり，得意としていたのは舞台での観客と即興のやりとりだったという。映画制作会社の人間が彼の舞台を見て，「あなたが探していた俳優だ」と声をかけてきた。つまり，ダーフィト・ヴネント監督の意図として，最初から，アドリブ的な場面をふんだんに取り入れる構想があった。いつおもしろい場面が撮影できるかわからないので，アドリブ場面は全部で380時間収録し，映画ではわずか30分に編集した。

マスッチによると，概略の台本はあったが，次に何が起こるか予想できない中でヒトラーになりきり，ヒトラーのイデオロギーを体した話を続けるのは非常に難しかった。確かに映画を見ても，まったくアドリブで，ヒトラーの思想をヒト

ラーが語るようにしゃべるというのは，高度な演技力を必要とすることは容易に想像が付く。

監督の意図は，ヒトラーに対するドイツ国民の反応を示すことでドイツの民主主義の現状を表現することにあったが，マスッチ自身，ドイツの中間層がいかに右傾化しているのかを知って驚いた，という。ただ，映画は決してヒトラーを賛美したものではない，映画を観た人はそのメッセージをきちんと受け止めてくれている，とマスッチは断ることを忘れなかった。